

書道教育を通しての人間形成に関する総合的研究

発表者：渡邊祐子

指導教員：押谷由夫先生

I 問題の所在

平成 23 年 4 月から小学校は、新しい学習指導要領の全面実施となった。特に国語科においては、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新たに加えられた。

この改訂は、平成 20 年 1 月に「幼稚園・小学校、中学校、高等学校、及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の答申の基本的な考え方を踏まえて行われた。その中に、「豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実については、徳育や体育の充実のほか、国語をはじめとする、言語に関する能力の重視や体験活動の充実により、他者、社会、自然、環境と関わる中で、これらとともに生きる自分への自信を持たせる必要があるとの提言がなされた」とある。このことを受け、「我が国の言語文化に親しむ態度を育てたり、国語の役割や特質についての理解深めたり、豊かな言語感覚を養ったりするための内容として、古典に親しみ伝統を享受し継承、発展させるために、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する」との内容が示された。

本研究は「伝統文化」として、書道教育が 21 世紀をになう子どもたちの、豊かな人間形成にどのような役割を果たせるのか、また書道を通して手で文字を書く事の価値や意義を見つめ直し、書道の歴史等、書道文化を踏まえて考察する。

II 研究の目的

本論文では、次の 6 点に目標を置き、研究を進めることを目的とする。

1、書道教育が人間形成に大きく影響を与え道徳教育において欠くことのできない総合性を持

っていることを明らかにし、美的情操教育の可能性を探る。

2、書道の文献や研究資料を収集して我が国における書道文化の特徴と変遷について理論的に考察する。

3、書道の作品を通して「自分らしさを表し、よりよく生きる力、自己表現力の身につけ方」を具体的に考察する。写経、書き初め、古典の臨書などが書道の歴史においてどのように人間形成にかかわり、それが日本独自の道徳文化、書道文化を生み出し、よりよい自己形成、精神の統一に繋がってきたか、書道文化の大切さを明らかにする。

4、現在、書道に興味を持ち、熱心に取り組んでいる子ども達にインタビュー、アンケート調査等を行い、今日の子供達における書道の意義と日々の生活文化や生き方の中に書道をどのように位置付け、定着させていくかを考察する。

5、小・中・高・大学において書道がどのように指導されているかを調査し、書道を通しての「心の教育」・「美育」・「道徳」という視点から、カリキュラム開発や家庭、地域と連携した取り組みなどの提案もしたい(書き初め、写経、絵手紙などの展覧会等)。

6、わが国の文化を大切にしながら、国際社会で活躍する子ども達を育てるためには、書道教育が大きく貢献している事を明らかにする。

III 研究の方法

1、先行研究(文献研究)

2、授業の参与観察(小、中、高・大学において参与観察及びインタビューをする)

3、筆者の書道塾に通う生徒の心の成長

IV 章の構成

第1章 人間形成と書道に関する理論的考察

- 第1節 我が国の教育の伝統
- 第2節 教育に関する書道の役割
- 第2章 書道文化の歴史的分析**
 - 第1節 漢字の渡来に始まる日本書道史における時代的背景
 - 第2節 日本文化にみられる日本人の心と造形美の考察
 - 第3節 江戸時代における文字文化・貝原益軒『和俗童子訓』からの考察
- 第3章 書道との出会いにおける道徳的発達及び自己表現力についての考察**
 - 第1節 幼児期から青年期における書道教育の果たす役割とコミュニケーションの変化
 - 第2節 発達段階における事例の考察
- 第4章 学習指導要領の変遷とその書道教育の歴史的背景**
 - 第1節 小・中・高等学校「書写・書道」の学習指導要領の変遷
 - 第2節 書道教育の歴史的背景
 - 第3節 指導法の新たな課題と提案
- 第5章 教員養成課程における書写・書道指導**
 - 第1節 書写・書道指導テキスト分析
 - 第2節 書写・書道の具体的指導のグランドデザイン
- 第6章 人間形成に果たす書道の在り方**
 - 第1節 生涯学習における書道
 - 第2節 グローバル社会における書道の役割
- 終章**
 - 第1節 研究の成果
 - 第2節 今後の課題と展望
- V 研究の内容**
 - 第4章 学習指導要領の変遷とその書道教育の歴史的背景**
 - 第1節 小・中・高等学校「書写・書道」の学習指導要領の変遷
 - 1・高等学校芸術書道改訂について

高等学校学習指導要領は、平成 25 年 4 月 1 日より年次進行により段階的に適用することとしている。

平成 20 年 1 月の中央教育審議答申において、学習指導要領改訂の基本的な考え方が示されるとともに、各教科等の改善の基本方針や主な改善事項が示されている。このたびの高等学校芸術科の改訂は、これらを踏まえて行ったものである。

芸術科書道の目標

書道の幅広い活動を通して、生涯にわたり書を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、書写能力の向上を図り、表現と鑑賞の基礎的な能力を伸ばし、書の伝統と文化についての理解を深める

(1) 芸術科書道の目標改善の要点

目標は次の三点について改善を図っている。

- 「書を愛する心情」に「生涯にわたり」を加えた。生涯にわたって書への永続的な愛好心を育てて行くことを重視した。
- 「書の伝統と文化について理解を深める」ことを新たに加えた。
- 中学校国語科書写からの接続と芸術科の目標を踏まえ、「感性を豊かにし、書写能力を高め」から「感性を高め、書写能力の向上を図り」と改めた。

目標に書かれてある「書道の幅広い活動を通して」とは、「書道Ⅰ」「書道Ⅱ」「書道Ⅲ」全般を通して、実生活との関連を図った体験的な学習や、地域社会との関連を図るなど多様な観点から書道にかかわりをもっていくという趣旨が込められている。すなわち生徒一人一人が書道の学習によって身に付けた能力を主体的に生活に生かすとともに地域社会の人材の協力を求めたり、美術館での鑑賞学習を取り入れたりして多様な学習活動が展開できるように配慮したものである。「生涯にわたり書を愛好する心情を育てる」は、書はいわゆる芸術的な作品ばかりではなく、身近な手書き文字や名筆への関心をもち、優れた書に興味を抱き、自ら進んで楽しみながらよりよい表現をしようとする態度の中から芽生えるも

のである。としている。これは、授業と言う形の枠を出て、将来の「生涯学習」に結びつけ、社会人として、あらゆる困難にも立ち向かえる基礎作りとして捉えることが重要であると考ええる。

(2) 芸術科書道の内容

A 表現

「表現」とは、「名筆を生かした表現を理解し、工夫すること」である。今回、新たに加えられた指導事項である。平安時代時代の書写本である「万葉集」「和漢朗詠集」等から近代までの多様な表現を理解し、更に自己表現の域まで広げ、新たな美を創り出そうという能動的な活動を主として行うことを目的とする。としている。

高校生自身がそれを楽しんで行うことが重要であると考ええる。楽しむことにより、生徒自らの表現意欲が高められたり、「風信帖」であれば、作者の空海が生きた時代背景に興味を馳せることもできる。平安の世と現代と1200年の時空を超え繋がる瞬間である。しっかり取り組み次世代に伝えて行くことが必要である。

B 鑑賞

「鑑賞」とは、「表現されたものの特性、表現効果、価値などを、美に対する感受性や知的理解の面から味わうこと」である。今回の改訂において一層重視している。教科書で終わるのではなく、美術館などに行き、本物に出会い、古典に親しみ、美的調和を養うことが自己成長につながると考える。

2・A 表現「漢字仮名交じり書」について

漢字や漢文を素材とする漢字の書や、和歌や俳句などを、平安時代の様式で変体仮名も用いて書く仮名の書は内容や読みにくさから、親しみにくいと言う一面がある。小・中学校で身につけた書写能力を基礎としながら、まず書への導入として、日常の漢字仮名交じりによる書の創作は、内容がわかりやすく親しみやすいと考える。多感な高校生期にとって、

自分と向き合い、自分の言葉で、自分を表現出来る、漢字仮名交じり書との出会いは、とても重要である。

書きたい思いを言葉や文字に表現することは、自分との対話なしにはなかなかできないことである。何を書こう、漠然と考えていても言葉は出てこないものである。

『学習指導要領解説 道徳編』第1章第2節では、「道徳は自らを見つめ、自らに問いかけることから、出発する。それは、外に表れている自己と内なる自己との対話を意味する。このことを通して、より積極的な自己像を描き、未来に夢と希望をもって力強く生きようとするところに主体性が確立され、自律的な人間が形成される」と示されている。

(1) 「漢字仮名交じり書」の指導事例より 都立S高校一年Yさんの自作詩より

「渦」
誰かの背中を追いかけてきた
憧れで行動してきた今までの自分
でも
「渦憧れるのはもうやめよう
越えるんだ！
親からもらった立派な足で
一步でも前へ！
進め自分

<Yさんの手紙>

今回、初めて自分で詩も考え、漢字仮名交じり書の作品を書きました。書道の前に、まず、詩を書く事が初めてだったので詩を作ることが、かなり難しかったです。

詩が完成した後は、たくさんの時間を使って考えた詩だったので、より自分の込めた思いを字で表現できたらいいなと思いました。

詩の内容が、過去を見つめ、未来へ向かっていくという構成だったので、過去の部分で小さく弱く、未来の部分で力強く大きく、といった形で前と後でのインパクトを作り、見

た人に印象づけることを目標にしました。漢字の配置、全体のバランスやまとまりに気をつけるのが難しかった。けれども重要なことだと学びました。しかし、過去の部分で、角々した字を書いたことにより、高校の先生には良い評価を得られなかったので、綺麗な字で統一し、書き直しました。このように、綺麗な字で書くのも楽しいですが、やはり私は、思いも強い作品だったので、自分の表現したいように、自由な字で書くほうが楽しかったです。

(2) 考察

この「渦」という詩を読んだ時、Yさんの心に秘めた「強い意志」が感じられた。この「強い意志」は、思い返せば、7年前、友達と一緒に我が門を叩いたその日から、垣間見えた。最初、自分の名前をひらがなで書いて貰った。「あ・・・ゆ・・・」本人は少し緊張しながら自分なりの文字で書いた。ノートに書かれた文字を筆者はいつも皆に指導するように殆ど直した。他の生徒はすぐに直して持ってきて、その直しに固執せず、今日学校であった出来事やらの会話で大忙しといった具合だった。そして、30分経った頃だろうか、まだYさんが直しを持って来ていないので、声掛けすると、最初の「あ」の文字が、自分の納得いく直しまで行かないので、同じ文字を2ページ近く書いていた。「ああああああああああああ・・・」と。「もうそろそろ良いのでは？」と言うと「まだもう少しいいですか？」という答えだった。結局、その日は「あ」で終わった。もくもくと机に向かう姿は今も変わっていない。中学校時代は大田区代表になり、その作品作りに毎日通い、夜遅くまで頑張っていた。書に向き合っている時は、寡黙だが、内なる闘志が伝わる。小学校、中学校、高等学校とその成長を少しでも応援出来たことは指導者として、とても嬉しい気持ちと、引き締まる思いだ。

詩の内容を文字に表す「漢字仮名交じり書」

との出会いにより、自分の過去を振り返り見つめることができ、未来へのメッセージや両親への感謝を表現できたことは「芸術書道における目標」に近づいたと考える。

堤 (2011) は「教育においては、子どもが他者との対話だけでなく、自分の胸に手をあてていろいろと自問自答することが奨励される。」とし、「自己内対話」と呼んでいる。さらに「自己内対話を積み重ねることで、自分自身の中でまだ整理されていなかったさまざまな考えや実感など相互につき合わせ、関連づけて、自分の頭の中を整理すれば、物事を自分で能動的に考えやすくなる。思慮深く、しかもいざという時にはかえって大胆かつ適切な決断ができるようになるだろう。自分で自分を導く力（いわゆる自己教育力）も伸びていくだろう。」と述べている。「自己内対話」をすることにより、将来への不安や迷いから解放され、「自己内対話」で生まれた言葉を、「漢字仮名交じり書」に、筆を持ち、白い大きな紙に思い切りぶつけることにより、自分の将来の目標がより明確になると考える。

以上の考察より「漢字仮名交じり書」の取り組みは高校生期にとって、重要な課題と考えられる。

VI 今後の課題

日本における伝統文化としての書道の位置付け、和様文化に見られる日本人の心とその造形美について先行研究及び文献研究により考察を進める。

VII 主な引用・参考文献

- 1) 押谷由夫編著 (2011)『自ら学ぶ道徳教育』保育出版社
- 2) 文部科学省『高等学校指導要領解説芸術編』(2009)
- 3) 名児耶明 (2008)『書の見方』角川学芸出版
- 4) 上條信山 (1993)『新書写書教育事典』